



SCENE 04

文学の舞台、かごしまをめぐる



南北約600kmに県土がおよぶ鹿児島。色濃い歴史と豊かな自然は、近代文学に名を残す作家たちにも刺激を与えた。あの作品のあの場所へ。本を片手に、ぶらりと出かけてみよう。

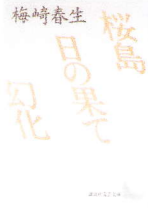


3. 日の移ろい

著者が奄美大島に在住していたときの日記をもとに、暮らしぶりや心の動きを書き綴った一冊。自転車事故の後「気鬱」から立ち直ろうともが姿が印象的。谷崎潤一郎賞受賞作。
【島尾敏雄】中央公論社／1976年

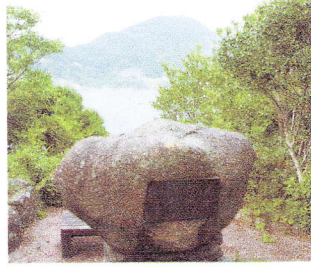


奄美市名瀬／県立図書館奄美分館の初代館長。館長舎は今も残る



2. 幻化

物語は主人公が精神病院を抜け出し、鹿児島に向かうところから始まる。軍人として任務していた頃を思い出し、鹿児島から坊津へ。元暗号特技兵だった著者の遺作でもある。
【梅崎春生】講談社文芸文庫／1989年



南さつま市 坊津／峠からのロケーション描写が絶妙!



1. 浮雲

戦時中から戦後にかけて、舞台を様々に変えながらヒロインの恋愛や運命を描く長編小説。放浪の作家である彼女の代表作だ。鹿児島島の港から屋久島へ渡る際の情景描写に注目。
【林芙美子】新潮文庫／1953年



屋久島町 安房／逃避行の2人は鹿児島から船で屋久島の安房港へ



6. 花嫁化鳥

日本各地をたずね、日本人の原風景を探る紀行文。当時、新婚旅行のメッカだった指宿のホテルに滞在して、花嫁観察や取材を行い作品に。もちろん、砂蒸し温泉も体験。
【寺山修司】中公文庫／2008年



指宿市 砂蒸し温泉／観察を続けながら指宿ならではの温泉も堪能



5. 阿房列車

1950～1955年にかけて執筆した紀行文シリーズ。鉄道好きな著者による鉄道旅行の様子が本筋。鹿児島島に訪れた際は鹿児島駅で下車し、城山の麓の旅館に宿泊している。
【内田百閒】ちくま文庫／2002年



鹿児島市 名勝 仙巖園／汽車旅に独自のこだわりを持つ著者は名所にも訪れた

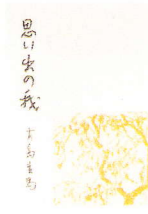


4. 眠る盃

エッセイの編「鹿児島感傷旅行」では、幼い頃に住んだ鹿児島市に訪れたときの様子が描かれている。通学した山下小学校、照国神社、山形屋など馴染みの場所が目白押し。
【向田邦子】講談社文庫／1982年



鹿児島市 桜島／年月を経ても変わらない雄大な桜島

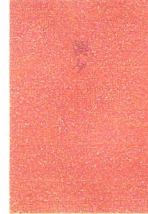


9. 思い出の我

画家であり作家。随筆集であるこの作品では、自らの誕生からイタリア留学までの半生を振り返る。病氣療養のため滞在した父親の故郷が薩摩川内市。画家を志すきっかけとなった。
【有島生馬】中央公論美術出版／1976年



薩摩川内市天辰町 血山天主堂跡／カトリック神父と出会いイタリア文学・芸術について啓発



8. 朝夕

「まごころ哲学」を信条とした著者の日常や生い立ちを綴るエッセイ。正直な心持ちと視点から描かれる文章は、粹で洒落。「父の郷里にて」の中で薩摩川内市が描かれている。
【里見弴】講談社／1965年



薩摩川内市 高城温泉郷／晩年、薩摩川内市に訪れた際に立ち寄った



7. 白洲正子自伝

白洲次郎の妻としても知られる彼女の祖父は維新の志士、榊山資紀。自身のルーツが鹿児島にあることや示現流への興味から、当地を訪れた様子が「隼人の国」で綴られている。
【白洲正子】新潮文庫／1999年



鹿児島市 示現流兵法史料館／当時は史料館に併設された旧道場で練習を見学